

# 柿と牡蠣とロシア人

長瀬 隆

長く商社に勤め、日ソ貿易にかかわって生活してきたので、日本国内でまたソ連でロシア人とは数多く飲食してきている。

勤めはじめて間もない冬で、日本においてだった。商談後の飲食のデザートに柿が出たのである。そのロシア名を、私は少なからず読んできたロシア文学書によつては知らず、和露辞典にあたつて調べたのである。クフルマーと記憶して

ロシアに勤務することになり、暮れに歳暮にもつた干し柿を持参した。ソ連には無いと思ひこんだことであつた。しかしそこはコトカサス山脈の南の温暖な土地であつた。数日後トビリシ市内の市場に行つた。するとそこに干し柿があつて驚いた。クフルマーはオラン語からトルシ語に入つたものであり、それがこの土地でこの異物を知つたロシア人によつてロシア語のなかにもたらされたのである。しかしこの土地に来たことのないロシア人は知らないのである。

牡蠣(かき)はフランス料理で重要な場所を占めており、欧米に勤務したことのあるロシア人はそれを食する。牡蠣はロシア語でウーストリツァというが、これはオランダ語からの外来語である。

クフルマーの場合とは異なつて、私はこれを和露辞典によらずに知つていたが、それは文学の教室でオシギンの韻文小説『オネギン』の講読をうけたことがあつたため、その最初のほうに、新興の港都都市ベテルアルクに西ヨロップから船で運ばれて来る珍物・珍味のうちにこれが挙げられていたのである。

フランス人の料理人を雇つ

ている皇帝や大貴族の館に選ばれたのであつて、庶民には手の届かぬものであつた。

面白ことに、来日して初めて牡蠣を食、かつ食しつつ、ウーストリツァの言葉を知らないロシア人はなかつた。数多いロシア文学の作品のうちで、ロシア人によつてもっとも愛好されているのは『オネギン』であつて、そのうちの断章はいくつも学校で習つており、インテリであれば全文は読んでいるのである。かくしてロシア人たちはウーストリツァを『オネギン』に出てくる珍味として記憶することになる。その異物を日本で食してあるものは感激してはいたが、味を聞かれて、あるものは悩ましげに首を振つた。

広大なソ連のなかでも日本に近接する、いわゆる極東地方のロシア人には、その食生活に日本人や朝鮮人の影響が見られる。かつては烏賊(いか)を食ふなかつたが、食べるようになった。昆布も同様で、ロシアではゆでた昆布にトマト・ケチャップをかけたり、オランダ語からのもをザハリン・サラダと称して出しているが、食べられたらうものではな

い。

わが樺太の故郷の村の遠親は大振り・美味な牡蠣を産するところであつた。ロシア人たちはそれを食しているであらうか。中知床半島は長浜まで行けることになつたらうである。遠端に行けるようになれば、それもまた確かめられるのだが。

(作家)

いた。しかしロシア人たちはこの異物を日本で初めて見ており、また私が覚えなかつたその言葉は知らなかつたのである。日本でも北海道には産しないこの果物が、ロシアに無いのは不思議ではなく、しかしクフルマーの名称があることを私はかねがね不思議に思つていた。だがわざわざ調べてみることはしなかつたのである。

ある年の正月あけのことであつた。私はソ連は南、イランやトルコと接するタ